小田実全集〔評論　第17巻〕

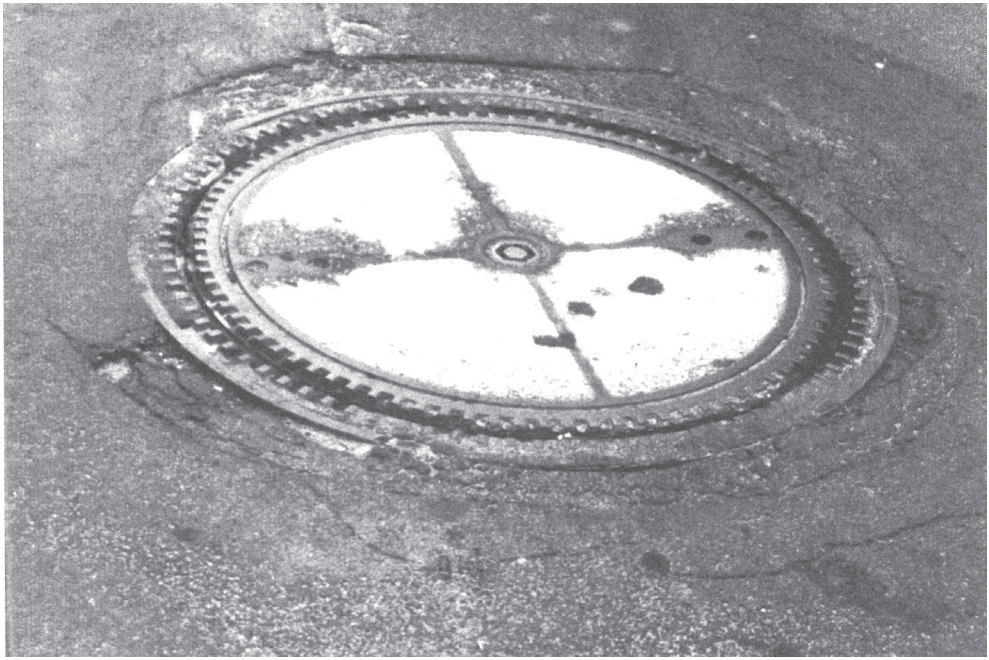
西ベルリンで見たこと
日本で考えたこと

講談社

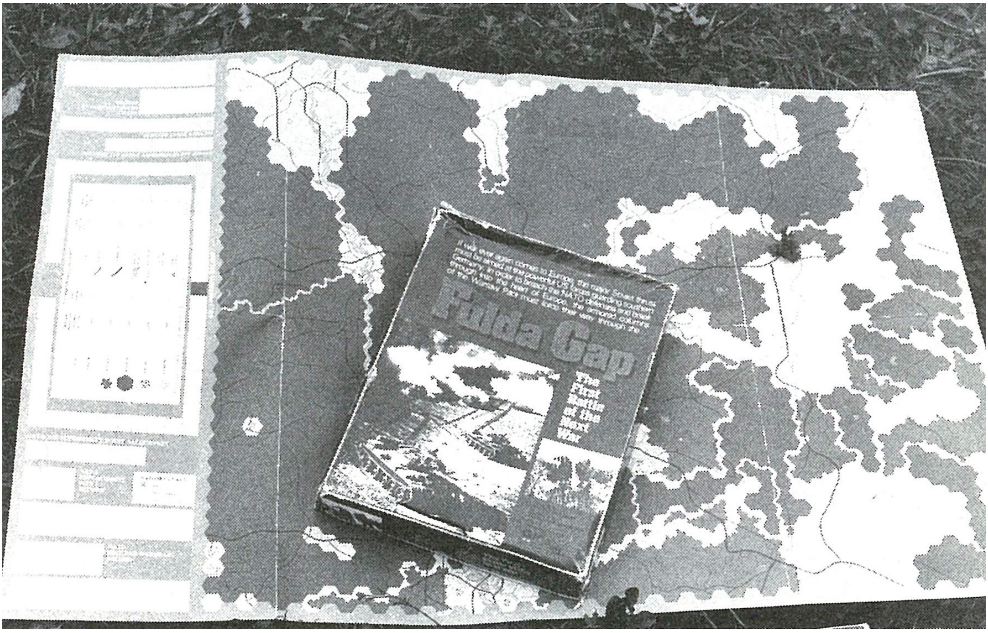
小田実全集

Makoto Oda

この美しい絵ハガキにあるような村ハッテンバッハが、もし戦争が起こればただちに「オイロシマ第一号」となって、「味方」の「核」によって住民もろともこの地上から消える。



ヘッセン州の「国境」近くの村や町からの出口にあたる道路には、必ずこのマンホールまがいの穴がある。この住民死滅のための穴が、住民のおかれている状況、さらには西ドイツ全体がおかれている状況のすべてを端的に示している。



これが「死のゲーム」だ。盤上で人びとは確実に死ぬが、「ゲーム」が現実に実施されないという保証はない。
（以上、三枚の写真にかかわってのくわしい説明は、本文「『死のゲーム』のシナリオ」=199 ページ = のなかにある）

目次

I　西ベルリンを通して西ドイツを考える

「市民社会」と「市民国家」・制度と空気　14

「東」「西」を見すえるさめた眼　27

「早メシ食い」のことから　38

「一切の暴力的なものを排した政治」　49

II　歴史を背負うこと

歴史を背負うこと　62

過去にケジメをつける　74

服装の自由と難民　84

クロイツベルクの若者たち　97

異質のものとの「共生」　110

みんなが街なかに住んでいることについて　119

自由の「模擬実験（シミュレーション）」　135

「ミドリ」的動きと「アメリカ」　146

Ⅲ

「壁」のなかで見えて来たもの 158
「壁」の平和を超えて 172
ことは今少し根本的な問題にかかわる 187
「しかし……」が行きかうベルリン 199
「死のゲーム」のシナリオ 214
逃げ場のない状況のなかで 224
構図を変えよう 237
日独「市民主導（イニシアティブ）」の連帯 240
「弱者の政治」の原理としての日本国憲法 259
プレッツェンゼー処刑場あとにて（談話） 264

Ⅳ

「居住中の芸術家」として 267
「居住中の芸術家」 273
カギの話 279
絵になる風景 285
私の八月六日、八月十五日 291
牛肉と自動車
彼らがおそれたのは……

西ベルリンの「老マレーネ・デートリッヒ」たち　297
「サムシング・スペシアル」の報告　302
「カール・マルクス通り」　308
「子供代々」の国での歴史と政治の「体現」の誕生　314
日独文学者の出会い　322
あとがき　336

カット

玄（ヒョン）　順恵（スンヒェ）

西ベルリンで見たこと
日本で考えたこと

I　西ベルリンを通して西ドイツを考える

「市民社会」と「市民国家」・制度と空気

1

私は一昨（一九八五）年六月から今（八七）年一月まで、西ドイツ政府「ドイツ学術交流会」（略称DAAD）からの基金を得て、直接の招待先の「ベルリン芸術家プログラム」の言い方で言えば「居住中の芸術家」ということになって西ベルリンでくらしたのだが、その滞在のあいだに見、感じ、考えたことを、これから「西ベルリンを通して西ドイツを考える」と題して書く。風来坊の私のことだ、西ベルリンに居つづけにいたのではなくてあいかわらずあちこちに足を伸ばして、アフリカのチュニジアにも行けば、「北朝鮮」（朝鮮民主主義人民共和国）にまでも出かけていたが、それでも、やはり、くらしの根城は西ベルリンにあった。それは、思考の根もともそこにあったということでもある。

私は西ベルリンでひとりぐらしをしていたのではなかった。「人生の同行者」もそこにいたし（「つれあい」のことを私はそんなふうに呼ぶ）、そのうち、女の子が生まれた。

そして、もうひとつ、言っておくと、その西ベルリン生まれの「ベルリンっ子」の母親の私の「人生の同行者」は日本人ではなく、日本で生まれ育った「朝鮮籍」の朝鮮人で、西ベルリンには旅券ならざる日本国法務省発行の「再入国許可書」をたずさえて行った。こういう奇妙なもので西ベルリンに長期滞在したのは彼女がはじめてでないかと思う。その長期滞在のあいだに、日朝混血児の女の子

が、今もって行政上は西ドイツではなくアメリカ合州国、イギリス、フランス、ソビエトの四国の占領下にある西ベルリンの「アメリカ地区（セクター）」で生まれた。日本、朝鮮の過去の歴史につけ加えて、国際政治のややこしいからみあいが子供の誕生にかかわっている。

私がこういう「私ごと」をはじめに書いておくのは、私が見、感じ、考えたことの根もとに、やはり、この種の「私ごと」と「公ごと」のいやおうなしのからみあいがあるからだが、このからみあいのおかげで私の思考がよりいっそう深いものになったとおこがましく言うつもりはない。ただ、からみあいを通じて見えて来るものはあったとは言えるにちがいない。

たとえば、旅券を持たない「人生の同行者」の位置の不安定さを痛切にそこで感じとることは（「こういう人は要するに国籍がないんですよ」と、あたかもその「国籍がないこと」を許しがたい罪悪のように言い放ったのは、西ベルリン駐在の日本の総領事だった。そして、領事館員たちは、彼らがぞくする同じ日本政府が発行した「再入国許可書」という奇妙な書類を彼女が見せるまで一度も見たことがないようだった）、それはそのまま西ベルリンの人口二百万人の一割以上（八三年には一二パーセント、八六年には一三パーセント）を占める外国人労働者や、私たちの滞在中にいっとき大量に東ベルリン経由で西ベルリンに入って来た世界のさまざまな国、地域からの難民の身分のふたしかさをわが身にひきつけて考えることだった。

かつて韓国は外国人労働者をさかんに送っていた国で（女性は看護婦、男性は炭坑労働者）、今はかつての労働者は学生ともなれば職業人ともなって西ドイツに住んでいるのだが、彼らがもっとも多く住んでいるのは西ベルリンだ。西ベルリン在住の日本人が六、七百人であるのに対して韓国人は千

五百人ほどが住んでいるという事実でそれは判ることだが、面白いのはこの西ベルリン在住の韓国人の人口の半数以上が「反体制」であることだった。いつか私自身も参加した西ベルリンの目抜きの大通り、「クーダム」で行われた韓国の民主化を要求するデモ行進には、百五十人、つまり、韓国人人口の一割ほどが参加した。韓国の民主化の運動を支援して来た私は西ベルリンに滞在する以前から彼らとさまざまな接触をしていたが、ただ、やはり、さらに親身なつながりを彼らともつようになったのには、「南」「北」という政治的帰属のちがいはあっても彼らの同胞のひとりである「人生の同行者」の存在が大いに関係しているにちがいなかった。そして、彼らとつながりをもつことは、西ベルリンにいてもアジアと切れないでつながっていることだった。それに外国人の労働者につけ加えて政治亡命者の多い西ベルリンは便利なところで、かつてから私はそこに住み、活動をつづけるアジアその他の「第三世界」の政治運動の人たちを知っていた。当の西ベルリンや西ドイツのことを考えるにあたっても、彼らとの接触は、あるひろがりと深さを私の思考にあたえていたように思う。

2

西ベルリンでくらしてよかったと思うのは、ひとつには、そこでくらしたおかげで、西ドイツという戦後に新しく出現した国家――いや、「国家」ということばより「社会」ということばをここで私は使いたいのだが、その戦後に新しく出現したドイツ社会の姿かたち、ありようが大づかみにつかみとれたことだ。もう少し正確に言うと、西ドイツ社会が過去のドイツ社会（のなかには、「ナチ・ドイツ」の社会も入れば、ワイマール共和国のそれも入れば、百年前の「ビスマルクのドイツ」社会も

入る）とちがって、現在の東ドイツ社会ともちがって、それをまさに西ドイツ社会にあらしめているゆえんのものが何かしら体得できた――そう言っていいように思う。

戦後の西ドイツにおける大工業国家としてのありようなら、これは何も目新しいことではないのだし、西ドイツの社会保障、福祉は日本とは比較にならないほどゆたかなものだが、もちろんムチとアメの政策であってもかなり完備した健康保険制度を労働者のためにつくり出したのが百年前の「ビスマルクのドイツ」だったという事実を考えるなら、これだって本質的にまったく新しいことではない。「ナチ・ドイツ」もムチの政策とともにアメのほうもそれなりにばらまくのに精を出したのだ（ここで私の友人の、神戸生まれ神戸育ちの私と同年輩のドイツ人の政治学者の自分の日本、ドイツ両者の社会体験に基づく日本認識を聞いておこう。「ドイツ人はアメとムチの双方をもらって来たが、日本人は徹底してムチだけをもらった）。民主主義の制度にしてもワイマール共和国でいちおうは体験ずみのことだし、社会主義の革命体験も第一次世界大戦直後に挫折に終ったとはいえ経験して来ている。そして、戦後の西ドイツが基本的に「国是」として来た「反共」は、姿かたちをかえても、「ナチ・ドイツ」の「国是」でもあれば、ワイマール共和国もその基本の上に政治をうちたてていた。

とすると、いったい、戦後の西ドイツを西ドイツとしてあらしめているゆえんのものは何かということになる。

それは、たとえば、こういうことだろうと思う。さっき私は西ベルリンの人口の一割近くを外国人――それも大半が外国人労働者が占めると書いたが、その多くはトルコ人だ。下町のクロイツベルク（区）あたりへ行くと、いっときそのあたりの地下を走る地下鉄「Uバーン」は「イスタンブール特

急」と呼ばれたくらいだから、トルコ人の姿はふんだんに見かける。男性はふつうの背広のいでたちだが（それは本国でも同じことだ）、女性はスカーフを頭にかぶり、長いスカートをはいて歩いている。街角にはトルコ人経営の八百屋が店を開き、トルコ語の掲示をかかげた銀行、旅行業者が並び、ソーセージのたぐいを売る「インビツス」と呼ばれる立ち食い屋には、ソーセージの代わりにトルコ風の焼き肉を売るのが目につく。それは、それほどトルコ人が、あるいは、彼らに象徴される外国人――ドイツ人によって異質なものとして、そして、自分たちの下に位置されるものと見られていた外国人が社会のなかに定着して来たと見ていいことだろう。私が西ベルリンでかかっていた歯医者はトルコ人だったし、眼鏡をつくるために検眼を受けた眼医者は目抜きの「クーダム」通りに診療所を持つ女医さんだったが、彼女は国籍をたしかめたことはなかったが、たぶん、どこかのアラブの人だった。

面白いことに、外国という異質のものの侵入は人間以外のもろもろにも見られることだ。一年七カ月ほど西ベルリンでくらした体験から自信をもって言えることだが、こと西ベルリンのような大都会にくらすかぎり、ダイコンとかハクサイ、あるいはナスビというような私たち日本人にとっておなじみの野菜をスーパーマーケットで得ることはもう決してむつかしくはない。こうした野菜は昔のドイツ人にとっては見たことも聞いたこともない野菜だったにちがいないのだが（今でもスーパーマーケットで、ナスビを指して、これはいかにして食べるのかを老女性に訊ねられたりすることはある）。トルコ人たちが大量にやって来たことで、彼らがドイツの土地でつくり始めるとともに西ドイツの人たちも食べ始めて、それはもうありふれた野菜になった。そして、ここでひとつ面白いことをつけ加えて言っておくと、東ドイツでは、それらの異質の野菜はまだまだいぜんとして異質の野菜であるこ

とをつづけているようだ。

こうした異質のものを受け入れるには、その社会が開かれたものであることが必要だろう。そして、社会が開かれたものであるためには、大きく言って、二つのことがらが必要であるにちがいない。ひとつは、まず、それが制度的に開かれたものであることだが、制度的に開かれたものであっても、社会にみなぎる空気が開かれたものでないと、制度はいきいきと作動するはずはない。制度と空気、その二つが開かれたものになってはじめて、社会はほんとうに開かれる。

もちろん、私はこの二つがともに今の西ドイツの社会において理想的なかたちであるなどと現実離れのしたことを言おうとしているのではない。異質、劣等視される外国人に対する差別はいぜんとして根強くあるし（西ドイツの田舎に住む私の知人の日本人女性は、きれいな服装をしてスーパーマーケットに行くと日本人と見られて店の人たちも愛想がいい。しかし、彼女はふだん着でスカーフなどかぶると一見トルコ人の女性に見える。そのとき店の態度は一変すると言っていた。勘定をまちがえたりすると、「おまえ、学校に行ったことあるんか」と言われたりするのだそうだ。また、彼女の「共生」の相手のドイツ人男性にはユダヤ人の血が入っているが、そんなことをあかるみに出せば、彼女の村ではたちまち「村八分」になる）、外国からの難民の受け入れは制度的に確立されているにもかかわらずさまざまに難くせをつけて受け入れを拒む（私はその受け入れ拒否の実態を西ベルリンの難民救援の市民運動の「カウンセリング」を通じて知った。受け入れの条件には、政治上の迫害、人種上、宗教上の迫害などいろいろ理由が法律的にあげられているが、政治上の迫害として認められるかどうか、実証は困難だし、また認めるかどうかはきわめて恣意的、そしてまさに政治的だという。ま

た、人種上の迫害は、政府はたいてい認めようとしない。南アフリカからの難民に対しても、だ）。

しかし、それにしてもである、私が今述べた難民の「カウンセリング」を見ていたとき、送還されれば確実に死刑にされるというイラクのクルド族の年老いた「政治犯」の難民が、「わたしはもうこんなタテマエのきれいごとだけの国には我慢がならなくなった。同じように大国で、しかもわたしと同じアジア人の国の日本に行きたい。おまえの国ならわたしを正当に難民として受け入れてくれるだろう」と言ったとき、私はかえすことばがなかったことを書いておきたい。彼は西ドイツ政府の政治のご都合主義によって長年西ドイツに住みながらいつ本国に送り還されるかも知れない（それは彼にとって死を意味する）という不安定な状態におかれているのだが、さて、わが日本となると――彼が鋭く批判するタテマエのきれいごとさえがない国として、わが日本はある。

あるいは、いささか個人的なことがらともひっかけて、次のようなことも書いておこう。開かれた制度にかかわってのことだ。西ドイツの社会保障のゆたかさを言う人は多いが、そして、それはたしかに「国はゆたかであっても個人は貧しい」（と言ったのは、西ドイツの高校を訪ねたとき、高校生が日本についての感想を私に訊ねられて言ったことばだ）日本とくらべるときわだってめだつ事実だが、もうひとつここでかんじんなことは、その社会保障が社会のどの成員に対しても開かれた制度であることだ。西ドイツ社会は子供が十六歳に達するまで「子供のお金（キンダーゲルト）」と称する「児童手当」をくれる社会だが（第一子四千円から始まって第二子、第三子と順に金額は高くなって、第四子二万円からは同額。子供が六、七人いると、食える）、この「子供のお金」は、外国で生まれ育って来た外国人の子供にも、彼、彼女が「住民登録」をして「住民」となった場合、くれる。さっきも書いたよう

に、私の一家の赤ん坊はベルリン生まれで、もちろん、「子供のお金」を授与されていたが、たとえ彼女が日本で生まれて育った子供であったとしても、西ベルリンに滞在しているあいだはもらえた。

今、私が書いたのは、制度のことだが、今度は空気のことを書いておこう。開かれた社会の空気のことである。今、西ドイツ、ことに西ベルリンでは、次のような事象は決して珍しいことではない。それはげんに私の知人の女性がしていたことだったが、自分に子供が生まれると、ひとり育てるのも二人育てるのもちがいはない。それなら——と決意して、同じ年の難民のベトナムの子供や貧しいアフリカの赤ん坊を貰い受けていっしょに育てる。そういうことをして、その私の知人の女性の場合はもう八年が経っていて、彼女の場合はドイツ人と韓国人二人の「双生児」だが、どちらももう八歳だ。「双生児」のうち韓国人の女の子のほうが利発で、ドイツ人の男の子よりできるという話だったが、男の子のほうは人がよくて女の子の世話をよくする。今、私はドイツ人、韓国人と便宜上書いたが、彼女の子供として、二人ともどちらも国籍はもちろん「西ドイツ」だ。そして、こういう例はもうありふれたことで、それは人が目くじらをたてることではすくなくとも西ベルリンではなくなっているように見えた。街角の小さな公園へ行くと、白いのと黒いのと「双生児」を連れて遊びに来ている母親に会うことがあっても、はじめは私ももの珍しげに見ていたのだが、そのうち慣れてしまって、彼女たちもただの公園の平和な風景となってしまった。

この「血縁」によらない親子関係が開かれた家族の形成となり、それはさらに開かれた社会の確立につながることはたやすく想像できることだが、もうひとつ開かれた家族の形成にかかわって言っておきたいことは、結婚という「制度」に依拠しないでおたがい「共生」者として生きようとする新し

い男女の結びつきが、「血縁」によらない親子関係の形成以上にありふれたことになっている事実だろう。ここで私が「同棲」という手アカにまみれたことばを使わないのは、そのことばには結婚という「制度」による男女の結びつきをオモテのものとしてそうした「制度」によらない関係の形成をウラとする思考がほの見えているからだ。ここで私の言う「共生」者としての結びつきは、ウラのものではない。それ自体がオモテのものとしてあって、そこになんのやましさも隠微なかげもない。

こうした「共生」者としての男女の結びつきが、男性中心、男性優位を前提とした家族関係とともに、そこによりどころをおいた従来の社会のありようを大きくゆるがせ、それを開いたものにするのは当然のことだ。この変化は社会の空気を変化させ、空気の変化は制度の変化をうながす。西ベルリンで子供の出産があって面白いと思ったのは、私という「父親」の存在はまったく無視されたことだ。「母子手帳」には「父親」の存在を書き込む欄はなかったし、病院でも、私と赤ん坊の関係、私と赤ん坊の母親との関係は一切訊ねられたことはなかった。また、子供の「出生証明書」には、「国籍」を書き込む欄もない。子供はそこでは父親何某を家父長とする家族のなかに生まれて来るのでもなければ、何某民族、何某国家の一成員として生まれて来るのでもない。あくまで地球上にあまた生存する人間のひとりとして、そしてまた、普遍的に世界大にひろがる市民社会の一員として——つまり「市民」として生まれて来る。

これは、ひと口に言えば、民族、国民を基本にした「民族国家」、「国民国家」から、「市民」によりどころをおいた「市民国家」、さらには「国家」のワク組みをも超えた「市民社会」への移行がそこに見られているということだろう。民族、国民は異質のものの存在を基本的に排除する傾きを持つ

が（「多民族国家」という基本をうちたててみたところで、その「多民族」のなかにいつでも中心存在としての一民族が出現して来たりする。アメリカ合州国の場合で言えば、それは今も変わらずヨーロッパ出自の白人であり、なかでもいぜんとして「白人・アングロ・サクソン・プロテスタント」の「ワスプ」である）、「市民」は異質のものの存在を前提としている。そして、それはその基本にある開放性によって「国家」のワク組みを超えている。本質においてことはそうなっているのだが、それは、逆に言うと、そうでないものは「市民」でないということだ。

現在、世界の「先進国」において、国家の政治の矛盾、問題を地域の住民の「自治」的活動によってなんとか解決しようとする動きが強いのは周知の事実だろう。ひとつの例として、世界大にひろがる「非核自治体」の運動をあげることができる。あるいは、日本においても見られるさまざまな「市民運動」の動き。骨太にまとめ上げて言えば、今「先進国」に大きく見られるのは、「民族国家」、「国民国家」の矛盾、問題を「市民社会」の力で解こうとする動きだろう。それを「民族国家」、「国民国家」を「市民社会」がまず「市民国家」として乗り越えようとする動きととらえても大きなまちがいはないだろう。「国家の解体」への志向がそこにはまちがいなくあるのだが、ただ、この動きはマルクス主義流に「資本主義→革命→社会主義……」というふうな過程でそれをやってのけようとしているのではないにちがいない。

私は、「先進国」（のなかには、ソビエトのような「東」の「先進国」も入る。ゴルバチョフ書記長の改革にも、私が今述べて来たようなことが反映している）の政治の動きのなかでもっとも新しいものとして考えるのは、この「市民社会」を基本にした動きだと考えるのだが、ここで考えておきたい

のは、あまり人が気づかぬことだが、西ドイツが東ドイツと並んで世界でもっとも新しい「先進国」であるという事実だ。もちろん、西ドイツをかつてのドイツを「継承」した国家だと見ることはできる。西ドイツ政府自体はそうした見方をとるが（「社会主義国家」としてそのかたちにおいても明瞭に過去と切れたはずの東ドイツ政府も、ときには西ドイツ政府以上にそうした「継承」を感じさせるものを示す）、逆の立場に立つこともできる。それは西ドイツをかつてのドイツと切れた新しい国家として見る見方だ。かつてのドイツが「民族国家」、「国民国家」なら、西ドイツはより「市民国家」的であり、「市民社会」的である――そうした見方をとるとき、西ドイツを西ドイツとしてあらしめているゆえんのものが明瞭に見えて来る。いや、次のように言ったほうがもっと正確かも知れない。見えて来るのは西ドイツのありようの本質をそんなふうに認識しようとする「市民」の姿かたちで、それがまさに西ドイツであり、西ドイツを西ドイツとしてあらしめているゆえんのものだ。このゆえんのものはかつてのドイツに見られなかったことだし、東ドイツにも微弱ながら、動き、志向はあっても、それはとうてい西ドイツほどの強さとひろがりをもってあることではない。

3

私は、さっき、西ベルリンにいたおかげで西ドイツの姿かたち、ありようが大づかみにつかみとることができたと書いた。いや、西ドイツが西ドイツであるゆえんのものを、認識し得たと書いたのだが、それは、西ベルリンがその意味でもっとも「西ドイツ的」であったからだ。西ドイツであるゆえんのものがもっとも強い、ある場合には、激しいかたちでそこにはあった。これにはいくつもの理由

があるだろうと思う。

まず、もともと大都市というものは、世界のどこでも異質のものがまざりあって「国民」的であるよりも「市民」的な場所であることだ。異質なものがまじりあえば、そこは開かれた場所ともなれば、逆に開かれた場所であるがゆえに異質なものが外からやって来てまじりあう。そして、異質なものがまじりあい、そこで「共生」して行くとすれば、当然そこには自由と平等の空気が濃厚になる。まさに都市は人を自由にするのだ。かつてのベルリンも「赤いベルリン」となって革命の本拠ともなれば、「ナチ・ドイツ」の時代にあっても、最後まで「反ナチ」、「非ナチ」の空気をすくなくとも他のドイツの場所にくらべて強くもちつづけた。屋根裏にかくれて生存しつづけたユダヤ人の数がベルリンでいちばん多かったのも、ただ人口が多かったからではない。市民に彼らを助ける人がいて、警官のなかにまでも「反ナチ」、「非ナチ」の空気があったからだ。

西ベルリンが首都でなくなった現在の西ドイツにあっても、その伝統は残っている。西ベルリンは他の西ドイツのどの地域、場所にくらべて、いや、他のどの都市にくらべても、はるかに開いていて、自由、平等の空気に満ちた場所であるにちがいない。人口の一割以上の外国人労働者の存在はこの開放性、自由、平等の空気の濃厚さを抜きにしては考えられないことだろう。開放性、自由、平等の空気あって彼らが来るのか、彼らがあまたやって来て開放性、自由、平等の空気を産み出すのか、それはまさにニワトリが先かタマゴが先かのたぐいのことだ。

同じことは、西ベルリンに住む純粋のドイツ人にも言えて、彼らはよく「あんな西ドイツみたいなところには住めない」というような言い方をする。「あんな」というのは、あんな保守的で、開放的

でない、自由、平等の空気の薄いところという意味だが、その気持ちもどこかに微妙にあってか、彼らは、たとえば、フランクフルトに行くとき、あるいは、ミュンヘン近くの自分の村に帰るとき、「西ドイツへ行く」という言い方をする。今、私は思わず「自分の村に帰る」と書いたが、考えてみると、今の西ベルリンの二百万人の人口のうち、多くがベルリン生まれ、ベルリン育ちの、その意味での「ベルリンっ子」ではない。西ベルリンでできた友人知己の大半が他のところから来た人たちで、その大半が「自由」を求めてやって来た人たちだった。外国からやって来た友人知己たち――たとえば、さっき述べた韓国人の友人知己たちはもちろん「ベルリンっ子」ではあり得ないが、皮肉なことに彼らの子供たちのほうは、西ドイツからやって来た純粋のドイツ人の友人知己を尻目にかけるようにして「ベルリンっ子」なのだ、いや、そう言えば、私たち一家の赤ん坊も「ベルリンっ子」として、純粋のドイツ人の子供同様西ベルリン「市民」としてこの世に生まれて来た。

「東」「西」を見すえるさめた眼

1

西ベルリンについて語るとき、忘れてならないのは、西ベルリンがいまだに占領下にあることだ。「アメリカ地区」「イギリス地区」「フランス地区」に分けて、それぞれアメリカ合州国、イギリス、フランスによって占領されているのだが、西ベルリンはこれら旧西側の連合国によって占領されているだけではない。ソビエトもまた占領国の一員であることをつづけていて、ベルリン全体にわたって最高の統治権者である（はずの）四国共同の管理司令部の建物のまえには、そこにはもうソビエト側の代表者はいないが、西側三国の国旗とともに赤旗が掲げられている。この四国による占領は逆に東ベルリンにも及んでいて、「西」側は「東」の「ソビエト地区」（がとりもなおさず東ベルリンである）に「巡視」に出かける権利を持ち、実際にもアメリカ合州国軍の車が東ベルリンをひとまわりするというようなただの威力誇示のいやがらせとしか思えないことをやっているという話だが、これは逆にも言えて、これは私は西ベルリンでくらしているあいだに見ようとしてついに果たさなかったことだが、ソビエト軍の車も一日に一度「巡視」に西ベルリンをまわる。

西ベルリンの市民が心のどこかで西ベルリンは西ドイツとちがうと感じていて、たとえば、フランクフルトへ行くとき、「西ドイツへ行く」というような表現を使ったり、「西ドイツ？　あんなところ

に住めるか」と言ったりすることは前章に書いたが、そういう言い方をするとき、西ベルリンが「占領地区」で、そこからは西ドイツの議会に「オブザーバー」をおくることはできても議員は出せないというような事情のことまでふくめてそう言っているかどうかは知らない。ただ東西南北どちらへ行っても「壁」にぶちあたり、そしてまた、ときには「西」側連合国の戦車が目抜きの大通りをわがもの顔に行進する西ベルリンは、戦後このかたの「東」「西」両陣営の対決のなかに取り残された「占領地」としてのありようを、ふだんのくらしのなかでもどこか感じさせる土地だ。しかし、この考えてみると頭が痛くなるような事態にも面白いことがあって、それは、このありよう、西ドイツと言わず連合国と言わず、すべての「国家」といういかめしげなものを漫画にしコケにしてしまうところがあるからだ。

たとえば、アメリカ合州国、イギリス、フランスの占領三国は、大統領が変わり、首相が変わるということがあれば、西ベルリンにやって来て、今や「東」になってしまったブランデンブルク門のまえに「壁」をへだてて立つ「お立ち台」の上に上がって、「東」をにらみつけながら演説をし、われら自由なる世界の象徴として西ベルリンの栄光をたたえるのが慣例になっているようだ。自由を愛する人間はすべて「ベルリンっ子」だ、それゆえに自分は「ベルリンっ子」だとのたまわって喝采を博したケネディ氏の昔はいざ知らず、彼についても今では実は「東」を挑発して「壁」をつくらせたのは彼だと主張する西ベルリン市民もいるくらいだが、ニクソン氏とかレーガン氏とか、あるいはサッチャー氏とかが自由の守護神めいた顔で御託宣をのたまうとなると悪い冗談としか言いようがないだろう。

数年まえにあきらかになったことがひとつあって、それはその自由の守護なるもの、実は西ドイツの市民の生命の犠牲の上になされるものであるということであった。これはあとで少しくわしく書くことにしたいが、この暴露、あるいは「発見」があって、「反核のうねり」が大きく西ドイツにまき起こった。

「占領地」の西ベルリンには、当然、アメリカ合州国、イギリス、フランスの三軍が駐留しているのだが（念のために言っておこう。「占領地」であるゆえに、これもまた当然、西ドイツ軍は存在していない）、この三軍が西ベルリン市民の自由を護るために駐留しているとは西ベルリン市民はまず誰も考えていないにちがいない。五三年に東ベルリンで起こった「ベルリン暴動」を毎年記念しての政治的祭日、六月十七日近辺には毎年三軍による示威のパレードがブランデンブルク門つづきのその名も「六月十七日通り」で行われるのだが、ときどき戦車がエンコして無用の長物と化したりするパレードを見物して判ることはさしずめ二つあって、ひとつがどう見てもこの三軍がわれらを護ってくれるものに見えないということであれば、もうひとつは、つまりはこの軍隊、ハリコのトラであって、いくさが始まれば、西ベルリンでの戦闘は半日ほどで終ってしまうだろうということだ。そのときには袋のネズミと化した三国の兵隊さんが西ベルリン市民の自由を護るために生命を犠牲にしてまでたたかうというようなことは期待するのも無理な話だし、よしんばそういう死闘を演じたところで勝敗ははじめからついている。西ベルリンの市民のほうも、かつての激烈な市街戦のあとが街角のアパートの壁にもなまなましい弾痕として歴然としている土地柄である。どこやら遠い地の自由の守護神を護るために自分の生命を投げ出すことなどさらさら考えていないにちがいない。

2

こうした自由の守護神がいかに手前勝手であるかを、最近にも西ベルリン市民は体験している。昨（八六）年四月のアメリカ合州国空軍によるリビア攻撃は、もとはと言えば、西ベルリンのディスコテクの爆破事件でアメリカ合州国軍の兵隊さんが死んだことに起因している。いや、それがリビアのしわざだとする口実のもとにこの巨大無謀な「国家テロ」は行われたのだが、こうしたでっちあげの口実で大いに迷惑を感じたのは西ドイツの人びとであり、ことに西ベルリンの市民だった。その彼らの気持ちは「国家テロ」の行われた翌日だかには、西ベルリンの若者と外国人労働者の居住地区クロイツベルクで、ただの「口コミ」を通じ、たちまち一万人余の抗議デモが行われたことで知れるというものだ。そして、そのうち、アメリカ合州国はかんじんの「国家テロ」の口実の真偽をウヤムヤにしてしまった。

ただ、こう書いて来たからと言って、西ベルリンの市民は「東」側を信じているわけではない。とにかく「壁」は厳然としてありつづけているのだ。「東」から「西」へ許可なしに越えようとすると、ときには射殺さえされるという事態はいぜんとして変わっていない。その点で、西ベルリンの市民の多くは「東」に対してなんの幻影も持っていないと言えるだろう。しかし、ここで話はまた逆転して、彼らが「東」に幻影を持っていないからと言って、それは彼らが「西」に幻影を持つということにはならない。ひところ日本でもはやった、かつての毛沢東主義者変じて一切の社会主義体制を全体主義独裁として弾劾するフランスの「新哲学者（ヌーボー・フィロゾーフ）」たちの著作が西ドイツでは一向にもてはやされな

かった理由を、私の友人の西ベルリン市民が「あの人たちは今ごろ『東』には強制収容所があると言い、それを大発見のようにして騒いでいるが、わたしたちはもうこれで四十年、その収容所と『壁』で接してくらしているのだ。彼らは今さら何を言っているのだろう」と説明してくれたことがある。「東」に自由がないと言って騒ぐことは、「西」の問題を解決することにはならない。

「西」は「西」で、自分のやり方で自分の問題を解決するほかはない。まして、「東」がなっていないことを自分の「転向」の口実にすることは許されない——それが友人の言いたいことだったにちがいない。

彼と言わず西ベルリンの市民は、「東」と「壁」で接して長年住んで来たことで、「東」「西」両陣営をさめた眼で見すえるようになって来ているように見える。事態はさめた眼で見るより仕方がなくなったのだと言ってもいいだろう。たとえば毎年、西ドイツは東ドイツにいわば人質の身代金めいたお金を払って、東ドイツから西ドイツへ移りたい人を引きとる。そしてまた、一昨（八五）年から昨年にかけて、スリランカ、パキスタンなどから難民が東ベルリン経由で多数やって来て西ドイツの大きな社会問題となったときには、東ドイツにさまざまなかたちでお金を渡して東ベルリンに難民を入れさせないようにした。こういう身代金めいたお金の取引を見ていれば、「東」「西」をひとしくさめた眼で見るようになってふしぎはないにちがいない。

西ドイツは徴兵制のしかれている国だが、西ベルリンは「占領地」であるゆえに若者は兵隊に行かなくてすむ。大学の男子学生の大半は「徴兵逃れ」で西ベルリンの大学にやって来ているのだと見てたいして見当ちがいではないだろう。十八歳以前にやって来て二十六歳までがんばっていると万事め

でたしめでたし。ただ、そこまでぐらいは私も以前から知っていたが、次のようなそれこそ国家をコケにするような事態があることは私は知らなかった。

私の若い知人が教えてくれたのだが、彼は西ドイツで「良心的兵役拒否」を申請したのだが却下され、裁判でも一審は負けた。こういうとき、国防省はご当人に「×月×日軍に出頭しろ」と手紙を出し、彼が行方をくらましていると、大新聞に同趣旨の広告を出してから逮捕に踏みきるのだが、知人は裁判で負けるとすぐ西ベルリンに移住して来た。そこでまず何をしたかと言うと、国防省に自分は今ここに住んでいるのだと手紙を書き送った。国防省は、ご当人が居どころをはっきりさせているので大新聞に広告を出せないし、西ベルリンは「占領地」なのでそこに住むご当人にも「×月×日軍に出頭しろ」うんぬんの令状も送ることができない。とどのつまり、彼が西ドイツに現れても政府は彼を逮捕できないし（こういう「手続き」をとっていないと、逮捕される。これは逆に言えば、西ベルリンにずっと居つづければ大丈夫だということでもある）、彼は軍隊に行かなくてすむ。この全体は、まさに漫画だ。

3

西ベルリンは東ドイツの体内深くにある「陸の孤島」である上に、「壁」の存在で「東」「西」まっぷたつに分裂しているおかげで、主な企業はあらかた逃げ出してしまった。名だたる企業で今、西ベルリンにいぜんとして大きな足がかりを持っているのは「ジーメンス」ぐらいだが、おかげで西ベルリンは経済の繁栄から取り残されてしまった。結果として目立つ現象は、たとえば、零細企業で生き

て行く外国人労働者の数が人口比にして多いことは前章で書いたが、純粋のドイツ人の人口について言えば、不釣り合いに多いのは若者と老人――ことに年老いた女性であって、逆に少ないのは、いわゆる働き盛りの壮年の人口である。働き盛りの人口が少ないのはそれだけまともな働き口が少ないことであれば（この現象に正比例して、西ベルリン在住の日本人の数が全体の人口に比して極端に少ないという現象が起こる。日本人がむらがることになる原因の商売というものがここにはない）、若者の人口が多いのは、「徴兵逃れ」も大きな理由だし、西ドイツにくらべて社会にはるかにみなぎる自由な空気が彼らをひきつけもする。老人――ことに老女性が多いのは、どこで住んでもいい年金生活者にとって経済の繁栄にとり残されたゆえに家賃がことのほか安いうえに、痩せても枯れてもかつての首都だ、ドイツ・オペラもあれば古い由緒のある喫茶店もあって、いぜんとして文化の中心であることをつづける西ベルリンぐらしは魅力的である。そして、西ベルリンの人口が減っては西ドイツの面子が立たぬとあって、西ドイツから西ベルリンに移住するのに政府はいろいろ便宜をはかる。おかげで優雅に毛皮のコートを着こなした老マレーネ・デートリッヒのごとき老女性に西ベルリンの街角で出会うこともしばしばあって、西ベルリンの老女性、たしかに着かざっていてもどこか田舎くさい西ドイツのなみの老女性とはひと味ちがっている。すくなくとも、その例は多いが、西ドイツが補助しているのは、何も老女性に対してだけではない。西ベルリンの経済自体が大きく西ドイツに依存していて、八三年度には、西ベルリンの財政全体の五三パーセントが西ドイツからの補助金でまかなわれた。西ベルリンの予算全体に対する西ベルリンからの税収入は二二パーセント。

繁栄からいささか取り残されたこととあいまって「東」「西」に分割されたありようがあって、全

体に都市計画を立てて古い建物をぶっこわして新しい建物をおったてるということが西ベルリンではなかなかできない。東ベルリンでは平気でやり出していたそうしたことを西ベルリンも今（八七）年が「ベルリン七五〇年祭」とかでかなりやり出しているようだが（このお祭りは「東」「西」ベルリンがそれぞれ勝手にやっている）、それでも西ベルリンのあちこちにナツクサヤツワモノドモガ夢ノアトをそのままに見せる空襲、市街戦のあとが草ボーボーの空き地として残っているし、弾痕をとどめた建物には二〇年代から三〇年代にかけてちょうど一世を風ビした「バウハウス」建築の建物もあって、こういうのを見ていると、ナチ・ドイツが出現して来たころの時代を彷彿とさせる。草ボーボーの空き地のなかには、「ゲシュタポ」本部の跡地もあれば、死への旅路に追いやったユダヤ人の集結場所だった建物もあちこちに残っている。東ベルリンに行けば、ヒトラーが自殺した総統官邸のあとの草ボーボーがあり、そうかと思うとゲッペルスの宣伝省は世界の平和運動と連帯する東ドイツの「連帯委員会」の事務所となり、ゲーリングのいかにも「ナチ・ドイツ」的に巨大で威圧的な建物は今は東ドイツの「経済企画委員会」だかのお役所だ。

そして、そうした「ナチ・ドイツ」の中枢存在的建物のあった通りをそのまま歩いて行けば今は草ボーボーの「ゲシュタポ」の本部に達するのだが、いや、達するはずなのだが、今はもと空軍省の巨大、威圧的建物ともと「ゲシュタポ」本部の草ボーボーのあいだには「東」「西」をへだて、同時に接しさせ対決させる「壁」があって行けない。

こうしたベルリン全体のありようを考えれば、それが「ナチ・ドイツ」という過去、戦争という過去、さらには「東」「西」の対決を基本にした戦後という過去――それはもちろん現在につながる過去だが、

そうしたもろもろの過去から容易に切れないことが判るだろう。過去の政治のありようをことさらに無視し、戦争を忘れ、戦後を簡単に総決算することなどできかねるということだ。そして、もうひとつ言っておくと、「東」「西」に分かれてしまった今、ベルリンはかつての世界に冠たる大帝国の大首都という夢を追うわけにはいかない。東ベルリンはそれでもまだ首都は首都だが、西ベルリンはもはや首都でも何でもなく人口二百万人の、人口の大きさで言えば大都市はいぜんとして大都市であっても、世界にそのクラスならいくらでもある都市のひとつにしかすぎない。ただ、世界にいくらでもあるそのクラスの大都市のなかで、西ベルリンは世界の他の都市には必ずしも見られないものを数多く持っていて、それが、たとえば、ドイツ・オペラであるとともに若者をひきつける自由な空気であり、外国人労働者を多数居住させる、また、老女性をゆったりとくらさせる社会の制度であるにちがいない。もうひとつ言えば、ドイツ・オペラは「ナチ・ドイツ」の時代にあっても存在していたものだが、若者をひきつける自由な空気も、外国人労働者を多数居住させ、老女性をゆったりとくらさせる社会の制度もそのときにはなかったものだ。

ただ、同時に、西ベルリンが世界の他の都市が持っていないもののなかには、もっと重苦しいものがあることはすでに書いて来た。それはたとえば、もと「ゲシュタポ」本部の草ボーボーであり、街角のアパートに残された弾痕であり、さらにはベルリンばかりではなく世界全体を「東」「西」に分かち、接しさせ、対決させる「壁」だろう。そして、すべてを考えあわせれば、これまで述べて来た西ベルリンの特質は、よかれあしかれ、たいていが西ドイツ全体の特質として言えることだ。西ベルリンのありようは、その西ドイツ全体にありわたる特質をその面積にふさわしく圧縮させ、さらに鋭いかた

ちで見せているのにちがいない。

たとえば、今、西ドイツ人の多くは、どこやら遠い国の自由の守護神のためにまぎれもない同胞である東ドイツの人たちと死闘を演じて、ともに潰え去ってしまうというようなことを誰も欲していないだろうし、また、自由の守護神たちが自らを犠牲にしてまで自分たちを護ってくれるとは考えていないだろう。それどころか、彼らは逆に自分たち西ドイツの人間を犠牲にして自らの勝利をはかろうとしているのではないかと危惧を持つ。しかし、そうかと言って、どうすればいいのか。「壁」での対決がそこにある以上（「壁」はベルリンだけにあるのではない。「東」「西」ドイツの国境にそって一三〇〇キロの長さにわたってある。西ドイツで宇宙飛行士になった第一号の男は、地上に還り着いて、地球はひとつだ、そう上から感じとられた、と言ったあと、しかし、「壁」は見えた、と言ったというのは有名な話である）、「西」側の一員として生きて行くほかはないし、「西」がここでひきさがれば、「東」が出て来るかも知れない。しかし、「西」はほんとうに信頼できるのか。いや、そのまえに、「西」はひきさがるというようなことはあり得るのか。東ドイツが「東」陣営の親玉ソビエトの言いなりになる一種の「占領地」であるように、西ドイツもまたアメリカ合州国の「占領地」ではないのか（実際、西ドイツにあるアメリカ合州国軍、イギリス軍、フランス軍の基地は、第二次大戦時の「占領地」の居つづけ、あるいは、居なおりであるのが多い）。そうかと言って、もちろん、「壁」で「東」の現実と接している西ドイツの人びとのことだ、「東」に幻影を持っているわけではないだろう。とどのつまり、さめた眼で「東」「西」の対決とともにそこに閉じ込められた自分の姿をいくぶんあきらめの気持ちとともに見すえることになる。——

しかし、これももとはと言えば、自らの愚行がもたらした結果なのだ。これもまた眼を開けばすぐに見えて来る現実としてある。たとえば、強制収容所の跡地もその気になれば、いくらでも見つけ出すことができるだろう。もちろん、西ドイツにも眼を開きたくない人はあまたいて、そういう人たちの気持ちが現在の保守派の政権をおしたてていることはまぎれもない事実だが、ただそれでも「ナチ・ドイツ」の「再評価」をふくめての歴史の「書きなおし」に端的に見られるような動きも、日本にくらべればはるかにまだ小さいものであるように見える。そして、ベルリンが「東」「西」に分かれて世界の大首都の夢を追えなくなったように、「東」「西」に分かれたドイツの一方の西ドイツには、かつての大帝国の夢の現代版の手放しの大国賛美は、そうした大国賛美が横行する日本にくらべてはるかに少ない。

「早メシ食い」のことから

1

私のような戦争末期――第二次世界大戦の終りあたりから戦後の一時期にかけて食べざかりの年ごろを過ごした「飢えたる世代」の特徴のひとつは、食べるのがむやみと早いことだが、西ベルリンに一年半余いて、そのあいだにできあがったドイツ人の友人知己にも、私同様の「早メシ食い」がけっこういる。この現象は簡単に説明がつくことで、それは彼らも日本の私たち同様、戦争末期から戦後の一時期にかけて「飢えたる世代」であったからだ。いつもおなかをすかせていたからガツガツ食べたのだし、またゆっくり食べていたりすると、横から手が伸びて自分のものがなくなったりする。アカの他人の手が伸びて来るのはもちろんのこと、ときには親子がイモのひときれを奪いあいをする。そういう体験が双方にあって、日独双方の「飢えたる世代」はともに「早メシ食い」になった。「おれは飢えたる世代（ハングリー・ジェネレイション）だよ。」私がそう言うと、彼らは苦笑する。私が何を言いたいか、彼らにはたちどころに判って、その苦笑となるのだが、それは彼らが私に同じことばを言い出しても同じことだ。私にもたちどころに彼らの言いたいことが判って、私も苦笑する。

もちろん、ここでちがいのことも書いておかなければならない。日本、ドイツ双方ともに無謀無茶な戦争をひき起こすなかで国民の食糧事情が窮迫して配給切符を発行したことまでは同じだが、「ナ

チ・ドイツ」の名誉のためにここで言っておきたいのは、ドイツのほうはとにかく配給切符分だけの食糧はなんとか確保し、供給しようとしたのに対して、わが日本政府はそんなことは一向に気にかけなかったことだ。これは戦後、アメリカ合州国の占領軍が発見して、こういう状態でよく国民が文句を言わなかったものだと呆れたという事実だが、ここらあたりも、「ドイツ人はアメとムチの双方をもらって来たが、日本人は徹底してムチだけをもらった」うんぬんの私の友人の、神戸生まれ神戸育ちの政治学者のことばはあたっている。彼も私と同年輩のドイツ人で、「早メシ食い」のひとりだが、ドイツ人もたしかに飢えていたが、日本人のほうがひどかったのではないかと言う。

もうひとつのちがいは、やはり、過去の蓄積のちがいで、そこには先発の帝国主義国としての蓄積もからんでいることだろうし、「アメ」の堆積もかかわっているにちがいないが、戦後すぐの廃墟のなかのドイツの子供たちの写真を見ていると、みんな痩せさらばえていてまさに戦後の私たちの感があるが、着ている物はそれぞれに立派で、なんだ、こんな物を着ていやがったのかという気持ちは正直言ってする。戦後廃墟と化したベルリンの跡かたづけをやってのけたのは女性たちだったというのは有名な話だが、これを写真で見ると、彼女たちの服装も同じころの日本の都会の焼け跡の女性たちが着ていた物にくらべて格段に立派だ。

もうひとつ、ついでにここで言っておくと、これは「ナチ・ドイツ」のアメとムチの政策にかかわることだが、戦争中、空襲にそなえて「ナチ・ドイツ」政府は、大都市のあちこちに巨大頑丈なコンクリートの箱のごとき「避難所（シェルター）」――ドイツ語で言うところの「ブンカー」をおったてた。日本流に言うなら「防空壕」だが、こちらのほうは地上五階建てぐらいのコンクリートの箱だ。べつに特権階

級用のものではなくまわりの住民はドイツ人であるかぎり誰でも入れたそうだが（それは、つまり、強制労働に使役されるために連れて来られたポーランド人は入れなかったということだ。もちろん、ユダヤ人は入れなかった。いや、そのまえに彼らはどこかの収容所に送られて、大半がガス室で消えていた）、それがそのままのかたちで西ベルリンやその他の大都会に残っているのは、あまりに巨大頑丈すぎてダイナマイトでぶっこわすとなるとまわりの建物がともに吹っ飛んでしまうからだ。それでもいくつかはこわしたそうだが、ハンマーでひとつひとつ壁を砕いてこわした。そのときにも活躍したのは、身なりは日本の女性にくらべてよかった女性たちだった。今も残るそうしたコンクリートの箱のなかには「核シェルター」として使われているものもあるらしいが、たいていはただの無用の長物の残骸として突っ立っているだけだが（もっとも「核シェルター」も、ほんとうのところは無用の長物だ）、西ベルリンにもいくつか残るコンクリートの箱のまえに立って私が考えることは、あのいくさのあいだ、日本政府はそういうコンクリートの「避難所（シェルター）」ひとつさえ国民にあたえなかったことだ。そういうことは政府のえらいさん方が夢にも考えたことがないことだったにちがいないのだが、空襲のさなか、私が両親や兄や姉たちとともに息をひそめて恐怖の何時間かを過ごしていたのは兄が庭先に掘ったお粗末なお手製の防空壕だった。

ただ、もちろん、そうしたさまざまにちがいはあったとしても、本質的に「ナチ・ドイツ」が日本同様、いや、それ以上に「ムチ」の政権であったことに変わりはないだろう。そしてまた、私と同年輩のドイツ人の友人知己たちが「飢えたる世代」であったことにおいて変わりはないにちがいない。結果として、「早メシ食い」の現場で、おたがいがおたがいの過去をふり返って苦笑することになるのだが、

この苦笑は何も自分たちの過去の飢えだけに向けられたものではない。たちまちおたがいの想念に浮かび上がって来るものは、おたがいの過去の歴史の総体とでも言うべきものであって、飢えやら「早メシ食い」やらはその歴史の総体の結果であるにすぎない。

つづきは製品版でお読みください。